

広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業(大学版)

活動成果報告書

岩国短期大学幼児教育科
准教授 井上美佳

1. 事業の概要

1.1 研究テーマと目的

本学は、広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業（大学版）の補助金交付を受け、「岩国市における多文化共生のまちづくりへの提言～子どもの教育・保育の実情調査と異文化交流を通して～」をテーマとする教育研究活動を実施した。

岩国市では、米軍基地関係者の家族やアジア圏からの在留外国人が増加し、幼稚園・保育所・学校に外国籍の子どもが多く在籍するようになり、多文化共生に関する地域課題が顕在化している。本学は保育者養成機関としての専門性を活かし、地域の子どもたちと外国に文化的ルーツをもつ幼少期の子どもたちとの交流活性化について研究実践を行い、地域課題解決に貢献することを目的としている。

1.2 連携体制

連携市町: 岩国市

連携企業・団体等: MCCS (Marine Corps Community Services)、岩国商工会議所、岩国幼稚園協会、岩国市保育協会、岩国市民活動支援センター登録団体等

1.3 参加学生の構成

研究代表学生メンバー(1年生5名、2年生5名)、
「多文化共生保育論」授業科目受講者(1年生35名)、
「親子広場」学生ボランティア(1年生10名)、
「岩国祭」ブース担当学生(1年生9名)、
「清流祭」国際交流ブース担当(1・2年生各5名)、
基地内保育施設(CDC)訪問参加(2年生45名)

以上、多層的な構成により、少人数での企画・運営経験と多人数での参加・学習機会を組み合わせ、多文化共生に関する理解と実践力の双方を高めることを狙いとしている。



2. 主な実施内容

2.1 親子広場での交流実践 (9月20日)

第4回親子広場「親子でワクワク表現あそび～なりきり遊びを楽しもう～」を開催し、15組の親子（保護者21名、子ども27名、外国籍の親子を含む）が参加した。学生による手遊び、親子表現遊び、日本語・英語絵本の読み聞かせ、紙コップおぼけの製作などを実施した。学生が主体的に企画・準備・実践を行い、多文化的な絵本や表現活動を取り入れることで、幼児と保護者が共に楽しみながら多様な文化に触れられる場づくりを実現できた。



2.2 岩国祭への参画（10月19日）



岩国商工会議所主催の岩国祭に本学ブースを設置し、学生が主体的に企画した遊びや展示を実施した。地域住民や子どもたちとの交流を通じて、多文化共生の視点からの情報発信に努めた。学生リーダー・副リーダー制を導入し、学生自身が主体的に企画・運営・振り返りを行うことで、リーダーシップと協働性を育成できた。

2.3 園訪問と地域理解の深化（10月）

10月24日に「外国籍乳幼児が在園する保育施設」へのフィールドワークを実施し、園での保育実践を見学するとともに、保育者への聞き取り調査を通じて、外国ルーツの子どもへの配慮や保護者とのコミュニケーションの工夫について学んだ。また、10月25日には「やまぐち国際交流フェスタ」に参加し、県内外の多文化共生の取組事例に触れる機会を得た。

2.4 清流祭における国際交流ブース（11月15日）

「清流祭（大学祭）」において国際交流ブース「違い発見ラボ！」を設置し、学生が企画した展示やワークショップを通じて、来場者と多文化共生について意見交換を行った。2年生が研究成果をポスター発表形式で表現し、1年生が体験ブースを運営することで、学年を超えた協働と学び合いが実現した。

2.5 基地内保育施設(CDC)訪問（1月23日）

本事業の集大成として、2年生37名が米軍岩国基地内の保育施設(Child Development Center)を訪問した。学生たちは、事前に準備した手遊び(「The itsy bitsy spider」「The Finger Family」「Hokey Pokey」等)、歌遊び、パネルシアター、絵本、紙芝居、リトミ



ックなどを実践し、言語や文化の違いを超えた子どもたちとの交流を体験した。「表現Ⅱ」の授業で手作りしたメダルを子どもたちに贈り、保育者としての充実感と達成感を味わった。CDC 職員との意見交換を通じて、多文化環境での子育て支援の在り方についても理解を深めることができた。

3. 成果と課題

3.1 主な成果

(1) 学生の学びと成長

学生が地域行事や親子広場、国際交流イベント等に主体的に関わることで、多文化共生に関する関心と理解が着実に高まった。企画・準備・実践・振り返りという PDCA サイクルによる研究を通じて、実践力が向上し、地域貢献への意欲を持った人材が育成されつつある。ホスピタリティ精神を意識した接遇実践を通じて、保育者に求められる対人コミュニケーション能力や、子どもの目線に立った関わり方を体験的に学ぶことができた。



(2) 地域連携の基盤形成

岩国市内の保育・教育関係団体、商工会議所、国際交流団体、米軍基地関係機関など、多様なステークホルダーとの協働体制が構築され、今後の継続的な連携の基盤が形成されている。岩国商工会議所青年部からの感謝状受領に象徴されるように、地域からの評価と信頼を得つつある。

(3) 実践的な理解の深化

フィールドワークやイベント参加を通して、外国ルーツの子どもや保護者が抱える課題や、地域側の受け入れ体制の現状を、学生が具体的事例として理解できるようになった。日本語と英語を組み合わせた絵本の読み聞かせや、多文化的な表現遊びの実践を通じて、言語の壁を越えたコミュニケーションの工夫について体験的に学んでいる。

(4) 産学公連携の実質化

本学の幼児教育科としての専門性を活かし、基地がある町「岩国市」の特色を踏まえた取組を展開できた。授業科目(「多文化共生保育論」「表現Ⅱ」「キャリア開発Ⅲ」等)との密接な連携を図り、取組成果を授業にフィードバックすることにより、学生の学びを充実させている。

3.2 課題と今後の改善点

台風によるフィールドワーク中止のように、天候等の外的要因により計画変更を余儀なくされる場面があり、柔軟な代替案の準備やスケジュールの組み方に課題がある。また、学生の参加は概ね良好であるものの、学年や授業・実習との兼ね合いから、負担の偏りが生じないよう配慮する必要がある。特に2年生は就職活動や実習が重なる時期もあり、スケジュール調整の工夫が求められる。

多数の連携団体との調整は、一部教職員に業務が集中しやすく、今後は学生リーダーの育成や事務負担軽減の工夫も求められる。また、本事業の成果を一過性のものとせず、次年度以降もどのような形で継続していくかは大きな検討課題である。補助期間終了後も、これまで構築してきた地域とのネットワークを維持・発展させるための方策を模索する必要がある。

4. 継続に向けた検討課題

本事業の成果を一過性のものとせず、次年度以降も継続していくため、以下の方向性を検討している。

- (1) **財源の多様化:** 大学独自の財源確保、他の助成制度・補助金の活用、企業・団体等からの協賛金の獲得
- (2) **カリキュラムへの組み込み:** 「多文化共生保育論」をはじめとする授業科目との連動を一層強化し、正課内活動として位置付けることで持続可能性を高める
- (3) **地域との協働体制の強化:** 連携団体との定期的な情報交換と協議の場の設定、学生の主体性を尊重しつつ地域のニーズに応える活動の継続
- (4) **ネットワークの維持・発展:** これまで構築してきた地域とのネットワークを維持・発展させ、他大学や他地域との情報共有と連携の可能性を模索

5. おわりに

令和7年7月から令和8年1月にかけて実施した本事業では、親子広場、岩国祭、清流祭、園訪問、やまぐち国際交流フェスタへの参加、米軍岩国基地内保育施設(CDC)訪問など、多様な活動を通じて、学生は多文化共生に関する理解を深め、実践力を高めることができた。本事業の最大の成果は、保育者を目指す学生が、地域の子どもたちと外国に文化的ルーツをもつ幼少期の子どもたちとの交流を実践的に体験し、多文化共生保育の意義と方法を体得できたことである。学生たちは、言語や文化の違いを超えたコミュニケーションの工夫、ホスピタリティ精神に基づく接遇実践、PDCAサイクルによる企画・運営・振り返りのプロセスを通じて、保育者としての資質を大きく向上させた。

また、岩国市が抱える「多文化共生のまちづくり」という地域課題に対し、本学の専門性を活かした貢献ができたことは、産学公連携の実質化という観点からも意義深い。今後も、本事業を通じて構築したネットワークを維持・発展させ、持続可能な形で地域の多文化共生のまちづくりに貢献していきたい。

最後に、本事業の実施にあたり、御支援と御協力を賜りました岩国市、MCCS、岩国商工会議所、岩国幼稚園協会、岩国市保育協会、岩国市民活動支援センター登録団体、そして広島広域都市圏推進課の皆様、心より感謝申し上げます。